私と彼と夜の月

RAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私と彼と夜の月

【Ｎコード】
Ｎ２３１９Ｔ

【作者名】
ＲＡＮ

【あらすじ】
昔から憧れていた隣のお兄さんは、私の学校の先生。
見えないものが見える能力を持つ家系の少女は、同じく能力をもつ青年に恋をしていた。
しかしその能力ゆえに、彼とはただ学校で起こる事件を解決していって時間が過ぎていく。
月の光が照らす夜。今日も悲しい声が聞こえる。

※サイト、ｄノベ、ノベトモ３掲載作品

夜ヲ想フ曲ノ譜面　<1>

静寂に沈む夜の学校。
好んでそこに来る者はいないだろう。
しかし、音楽室から聞こえてくるかすかなピアノの音色。
夜の学校には少し不似合いな、楽しげな明るい曲調。

河野香織（こうのかおり）はそっと音楽室の中を覗く。
しかし、そこには誰もいなかった。
月の光が差し込む、暗闇の音楽室であった。
香織はゆっくりとした足取りで音楽室へ足を進めた。
窓際にあるピアノへと近づいていく。
一瞬、周りの気配がざわついたように感じられた。
だが、香織は気にせずに足を進める。少し速度をあげた。
そうして、ピアノの鍵盤がある前に立った。
ゆっくりと蓋を開ける。
開けた瞬間、勢いよく周りに風が巻き起こった。
香織は、その風に囲まれ、その場に崩れた。

と、それを待っていたかのように、勢いよく音楽室へ入る影があった。
そして、香織の倒れた体を抱き起こす。

「香織……？」
月の光で浮き上がるのは男性。スーツを着用し、やや長めの整った茶髪。
香織よりも幾分年上のような外見、落ち着いた声をしていた。
香織は呼ばれても返事をしない。
開いた虚ろな目は、空中をさまよっている。

男は少し口を閉じ、香織の耳元に口を近づけて、ささやいた。
「……あなたの名前を教えてください」
――……ミナ……。
「ミナさん？　それじゃあ、あなたはなぜここにいるのか、教えていただけますか？」
――……わからない……あなたは、嫌……帰る……。
男の問いに、香織、いや、ミナと名乗った者の視線が忙しなく動く。
「え……ちょっと……あぁ……」
ミナの答えに、男は一瞬慌てたが、香織が目を閉じ、その力が一気に抜けると、あきらめたようにため息を吐いた。

「おはよう、河野」
「おはよう……ございます」
翌日の朝、登校して校門を通ろうとする香織に、声をかける男。
「今日も頼むぞ」
笑顔で言う男に、香織は疲れたように肩をおろした。
「……藤堂先生、学校では話をしないんでしたよね？」
「あぁ、だから普通通りにお前はここを通り過ぎろ。とりあえず今日も昨日と同じように行く。またその後家で話そう」
男、藤堂は笑顔はそのままで、手を払う仕草をした。
「りょーかい」
香織は気のない返事をして、そのまま登校した。

「おはよう香織」
「おはよう」
クラスメイトの桜が声をかけてきた。
どこか人を寄せ付けない雰囲気を持つ彼女だが、香織となぜか気

が合い、よく行動を一緒にするようになった。
「……香織、今日藤堂先生と何か話をしてたよね」
「え？　んー、うん、どうかした？」
挨拶の後すぐに、桜が香織に近づいて、少し低い声で言う。
こういう時の彼女の鋭さは、少し怖かった。
「香織って、藤堂先生と妙に仲がいいような気がして。どういう関係なのかなぁ、と」
「あぁ、実は幼なじみなの。ずっと家がお隣りさんで、私が生まれる前から向こうは私のこと知ってるもんだから、お父さん気分でね」
香織は、自分の声がいつもと違うことは感じていた。妙な緊張感が彼女には確かにあった。
嘘は言ってはいない。この学校の数学教師である藤堂春来（とうどうはるき）は、香織のお隣りさんで、向こうは香織のことを生まれた時から知っている。
「ふーん、そう」
桜は少し香織を見つめた。桜に勘づかれて何か言われないかと、内心ひやひやしていた。
確かに、それ以外に何もないわけではなかったのだが、そのことは説明するのが大変なので、あまり香織は人に話さないようにしていた。
彼女の妙に大人っぽい雰囲気は伊達ではなく、洞察力というか、人の機知を察する能力が高いのを香織は知っている。
だが、香織の肩にポンと手を置いて言った。
「何かあったら、言うのよ」
妙に優しい温かみを含んでいた。
「う、うん、ありがと」
桜はそれだけを言うと、あとはそのことについて触れることはなかった。
「あ、そういえばさ……」
そして、香織はふと思いついたことがあり、桜に相談してみるこ

とにした。
桜は妙に博識でもあった。

夜ヲ想フ曲ノ譜面　＜2＞

そしてその日の夜。
香織はまた学校の音楽室にいた。今日はピアノの椅子の隣に、教室の椅子を持ってきて、ピアノに向かっている。
彼女は、鍵盤の上に手を置くと、静かに曲を弾き始めた。
昨日聞いた曲が聞いたことあるなと感じた香織は、桜に聞いてみたのだ。
実は桜も香織もピアノを習っていたことがあり、同じ教室に通っていたという共通点もあったのだった。
そして桜に聞いてわかったのが、曲はベートーベンの「Ｉｃｈｌｉｅｂｅ　ｄｉｃｈ」だということ。
夜の学校には似つかわしくない、明るい曲調の愛を語り、願う歌だ。
弾き始めて数分、すぐ隣にざわつく気配を感じて、香織は手を止めた。
隣を見ると、髪を顎の長さぐらいで切りそろえた黒髪の少女が座っていた。
突然現れた彼女が何者かわからない。恐らく昨日ミナと名乗っていた者であろうとは思われるが。
だが、普通の人ではないことは香織にはわかった。
彼女には、家族以外には秘密にしていることがあった。
それは、家が代々霊と対話する能力を持つ家系であること。
また、その能力を使い、彷徨う霊の未練などを解消することをしているのだ。
物心ついた時から教えられ、対処法も学んできた。
その経験から、まずミナが生きている人間ではないことを察した。
その目は鍵盤を見つめている。どこか悲しげに。

「……月の出ている夜は、私なんだかドキドキするの」
香織は、ミナから視線をそらして、同じように鍵盤に目を移して言った。
誰に話すでもなく、独り言のような。それでいて、話しかけるような。
まずは話すことから始める。
見えること以外に特別な能力があるわけではないので、対話をして相手を納得させていく。
香織達がしているのは、ただそれだけのことである。
「何か起こりそうな、そんな予感がして。そして今日もまたあなたに会えた」
ミナは何も言わない。香織はそのまま言葉を続ける。
「予感とか言ったけど、そんな言葉にできるものじゃなくて、ただ単純にドキドキするだけ。不思議だけど。あなたのピアノが聞こえるのも、毎回月の出ている夜のような気がするのだけど、何かあるのかな」
香織はそこで一旦口を閉じる。そして、口をゆっくりと開き、先ほどとは違う低い、しかし優しい声で言った。
「……なぜ、そんな目で見ているの？」
隣の気配がざわつくの感じた。
――……たぶん、あなたと同じ気持ちだからだよ。
昨日聞いた少女の声と同じ声。それが近くで聞こえた。
同時に、ざわついた気配も近づく。
香織は、嫌な予感がして動こうとしたが、もう体を動かすことができない。
まずい、香織は直感的にそう思っていた。
少女がまた入り込んでくる。自分の中に。同調した、中に。
そう感じた瞬間、一気に何かが流れこんできた。
目の前ではなく、目の裏、内側に映像が次々とスライドのように出てくる。

「香織！！」

名前を呼ばれて、香織は一気に目を見開いた。
まず目に映ったのは、藤堂の顔だった。
珍しく、少し焦った顔をしていた。
そして、周りを手探りして、自分の状態を確認する。
手に触れるのは冷たい木の感触。椅子に座っていたと思っていた自分は、音楽室の床に仰向けになっていた。
香織は不安になり、何があったのかと目で藤堂に問うた。
藤堂は、安心したように一息をつき、床に倒れている香織をまず抱き起こした。
冷たい床から、温かい藤堂の体温に包まれ、香織も少しほっとした。
「悪かった。今日はもう何も気にするな。休もう。送っていくから」
そう言うと藤堂は、ハンカチを取り出して香織の目元をぬぐった。
香織はどうやら涙を流していたようだ。
それも、大泣きしていたようだ。目が熱をもっているのがだんだんと感じられてきた。
香織は今の状態が心地良くて、黙ってうなずいた。

夜ヲ想フ曲ノ譜面　＜3＞

藤堂の家系も香織と同じことをしていた。
というより、代々藤堂の家と香織の家は協力をして霊に対していた。
六歳差であるから、学校が一緒になることはほとんどなかったが、行く学校はことごとく一緒であったため、互いにつてを利用して互いの学校の事件などを解決していたのだった。
そして、高校になって藤堂が先生という形で母校に赴任することになり、こうして二人で動くことができるようになった。
藤堂が大学に通うことになって、大学が離れていたため一人暮らしを始めた。
その頃から藤堂に会わなくなり、疎遠となった。
そして、高校で久しぶりに再会した彼は以前とは違う印象になっていた。
外見はもちろんだったが、それだけではなかった。
雰囲気が、香織自身も説明しづらい空気感でしかなかったのだが、どこか自信に溢れているような、溢れすぎていて逆に傲慢で、時に自分勝手に見えるようであった。
それを、彼は顔が良かったのもあってか、大人の余裕などと女子生徒は思っていて、人気はあった。
男子生徒からの印象はあまりよくなかったが、彼には隙がなかったので、特段いじめられるとかそういうものもなかった。
そう、とにかく言ってしまえば、彼は隙がない、何ともつかみどころのない人になってしまっていた。
昔は、まだ話しかけやすい人のように感じていたのだが、今は何だか近寄り難い人になってしまっていた。
だが、向こうは何も気にせず近づいてくる。
態度は、一応教師と生徒であるため、それらしい態度を取っては

いるが。
昔と違うのは、少し強引に香織を連れまわすようになったことだろうか。
前は、香織を引っ張っていったことに変わりはないが、リードしてくれていた、という言い方の方がしっくりきていた。どこか優しさがあった。
今は、何だか体よく使われているような気が、香織はしていた。
それをどことなく寂しく感じていたのも、近寄り難く感じていた要因かもしれない。

香織は、ぼんやりと自分のベッドに横たわって、思考を巡らせていた。
ベッドの脇には藤堂がいて、香織の顔を覗き込んでいた。
さすがにいたたまれなくなったので、香織は藤堂に視線を向けた。
「先生、もう、大丈夫だから帰ってください。先生も疲れてるでしょう。わざわざ送ってもらってありがとうございました」
香織の言葉に、ぼんやりと香織を見ていた藤堂も、香織に目の焦点を合わせた。
そして、すぐに笑顔を浮かべた。しかしその笑顔は、どこか悲しげだった。なぜ、そんな顔をするのだろうか、と香織は疑問だった。
何か悪いことを言っただろうか。失礼だっただろうか。
「……学校では、先生と生徒だけど、外に出ても、もう昔みたいには俺のこと呼んでくれないのかな」
「え……？」
「いや、悪い。邪魔したな。俺も帰るよ。ゆっくり休め。明日は夜行くのやめよう。また日を改めて行こう。じゃあ、おやすみ」
言うと、藤堂は香織の部屋から出て行った。
扉をゆっくりと閉める音が、静かに響いた。
今日の藤堂は、何だか優しかった。

夜ヲ想フ曲ノ譜面　＜４＞

そして、また次の日の夜。
今度は藤堂は何も声をかけてこなかった。それはそれで、いつも通りであった。
だが、香織は、今日の放課後も音楽室にいた。
藤堂は来なくて良いと言ったが、香織には思うところがあり、またこうして来てしまっていた。
藤堂が不在で霊と対峙するのは不安ではあったが、初めてでもないので、やってみることにした。
何より、その思うところに関しては、あまり藤堂に知られてほしくないものだったからだ。
吹奏楽部の練習が終わり、誰もいなくなって暗く静かになった音楽室に、また香織は一人入った。
そして、ピアノの側へ行き、昨日と同じように教室の椅子を引き寄せて、座った。
また同じように、ベートーベンの「Ｉｃｈ　ｌｉｅｂｅ　ｄｉｃｈ」を弾き始める。
一曲弾き終えて、彼女、ミナの気配を後ろに感じた。
香織は、静かに後ろを振り向いた。
顎までの黒髪の少女がいた。ミナだ。
「ミナさん……」
少女は黙って香織を見ている。
「……私、昨日あなたの記憶が流れこんできて、私と一緒だって意味がわかった」
――あなたはあまり認めたくないようだったけど。
香織の声も、ミナの声も、同じように淡々としていて、静かに流れていった。
「うん……そうね……。考えないようにしていた、というのが正解

かな。考えたら辛くなるから」
――私も辛かった。でも、あなたと違って、私も、彼もお互いに愛してる気持ちは認め合ってた。
「そう、そうだったね。それがこの曲にも現れてた。こんな風に愛していたのなら、私は貴方達は幸せだったと思う」
――……あなたと比べれば、ね。私も彼もこの曲が好きで、これを愛の言葉の代わりにしていた。素敵な日々だった。それでも私は彼と一緒に生きたかった。それだけだったのに。
「一緒に生きたかったのに、自殺をしたの？」
香織は核心をつく言葉を言った。
昨日の記憶で流れてきたもの。昔、学校の音楽を担当していた先生と、女生徒の温かな恋の日々だった。
彼女は吹奏楽部にも所属していて、先生とよく一緒になることがあり、そこから仲を深めていった。
――……私は生徒で、彼は先生で。いつもそれでお互い都合の悪いことがあったし、喧嘩もしていた。苦しかった。
「だけど、あなただけがここに残っている？」
――……私だけ苦しいままここに残って、彼だけは今幸せに生きている。どうしてだろう。
「……あなたが、死んでしまったからだと思う。そして、彼が生きていたからだと思う」
記憶には、少女が死んでからのものもあった。音楽室から離れることができなくなっていた彼女の魂であったが、音楽室にいる生徒の話を聴くことはできた。
そしてそこで聞いてしまうのだ。かつて自分が愛していた教師が結婚したことを。
――……私はこんなに彼を愛して苦しいままここに残っているのに、彼はもう私を忘れているのだろうか。
「いいえ。彼が忘れるはずない。だけど、生きていればその思いを抱えたまま新しい気持ちを持つことができた。でも、あなたは死ん

でしまったから、苦しい気持ちのままそれ以外のものを得ることができないでいる」

夜ヲ想フ曲ノ譜面　＜5＞

――……もう、彼は私を愛することはないのかしら。

「あなたを愛していたことに変わりはないけれど、もう過去になってしまっているとは思う。それは、あなたが死んでしまったことにも原因がある。時間は人をどういう風にも変えていく。彼はあなたを失った悲しみを乗り越えてしまったのでしょう。生きていれば、そうして変わっていくことができた。もちろん、先生と生徒という壁だって」

――……あなたが言っても、説得力がないけれど。

痛いところをつかれて、香織は思わず苦笑いを浮かべた。だが、ミナの雰囲気がなごんできたようで安心した。

「そうね。でも、私の気持ちも、誰かの気持ちも、まだ時がたてば変わるかもしれない。全ては生きていればどうにかできるかもしれない。生きてみなくちゃ、わからないの。私も。だから、あなたもまた新しい気持ちで違うものを始めてほしいの」

――あなたは、そのお手伝いをしてくれるというのかしら。

ミナの顔にも、やっと笑顔が出てきた。

「えぇ、手を出して」

ミナがゆっくりと差し出した手を香織は取る。

見えない手は、こんな時でも嫌な冷ややかさを持っていた。

香織は、構わずその差し出された手を大事に両手で包みこみ、額をこすりつけた。

そして、静かに歌い出す。あの歌を。

（貴方を愛する　貴方が私を愛するように　朝も夕べも）

（一日として　貴方と私　二人が憂いを分かちあわない時はなかった）

ミナも声を合わせて歌う。
（そんな憂いも　二人で分かちあえば　耐え忍ぶのは易しいことだった）
（私の悲しみには　貴方が慰めとなり　貴方の嘆きに　私は泣いた）
だんだんとミナを握る手に熱がこもってきたような気がする。
（神の祝福が貴方にありますように　私の至上の喜びである貴方よ）
（神がどうか貴方を守り　私の側に置いてくださいますように）
（私達二人を守り　どうか支えてくださいますように）
歌いきって、ミナの方を向くと、もう彼女は消えていた。
次の瞬間、ありがとう、と彼女の声が聞こえた気がして、後ろを振り返った。
振り返った先は音楽室の扉で、そこには、藤堂がいた。
香織はよく状況が飲み込めず固まってしまった。
藤堂は無表情であったが、どうやら怒っているということは口の結び方から何となく察することができた。
そして、そのままの表情で足取り荒く香織に近づいてくる。
「何をやっていたんだ」
「……あ……えーっと……あの……」
香織が何か言おうとする前に、口をふさがれた。
口というか、顔全体という方が正解だろうか。
気づいたら、藤堂に抱きしめられていた。
「あー、もう、ちゃんと生きてるんだな、お前。……もう、心配かけるんじゃねぇよ。黙っていなくなるなよ」
その状態が心地良くて、香織はとりあえず何も言わずに、そのままでいることにした。

彼女のように、あの歌のような言葉を言える日はまだ遠いけれど、
今は心の中で、何回でも言おう。

私は貴方を愛する。神様でも何でもいい。どうか、お願いします。
貴方が、ずっと幸せでいられるように。

和訳歌詞参考：ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｊｐ／ｌｕｎｅ｜ｍｏｎｏｇａｔａｒｉ／ｌｉｅｂｅ．ｈｔｍｌ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2319t/

私と彼と夜の月

2011年9月14日03時14分発行